

Title	英國の重農主義者(上)
Author(s)	堀, 經夫
Citation	經濟論叢 (1931), 33(4): 495-505
Issue Date	1931-10-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/130093">http://dx.doi.org/10.14989/130093</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷三十三第

行發日一月十年六和昭

## 論叢

公私混合營業……………法學博士 神戸正雄  
英國の重農主義者……………經濟學博士 堀經夫  
マルクス地代論の解釋……………文學博士 高田保馬

## 時論

滿蒙爭議の實相……………經濟學博士 作田莊一

## 研究

金數量説に就いて……………經濟學士 松岡孝兒  
ゼーリング教授の農業恐慌論……………經濟學士 靜田均  
住居統計に就いて……………經濟學士 岡崎文規

## 說苑

育子教諭書について……………經濟學博士 本庄榮治郎  
商品勘定の損益分記法……………經濟學士 小菅敏郎  
助郷不勤滞金の處分……………經濟學士 黒羽兵治郎  
デシールの「漁業經濟論」に就いて……………經濟學士 岡本清造  
纖維工業と勞働……………經濟學士 菊田太郎

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

# 英國の重農主義者（上）

堀 經 夫

## 緒 言

英國の學者ヘンリ・ヒグズ教授は、其の舊著『重農主義者』の中で、『英國に於ける、重農主義者の主たる歸依者は、キリヤム・スペンスであつた』<sup>1)</sup>といつて居る。然るに重農主義研究の一權威たる瑞西の學者アウグスト・オンケンは、其の著『經濟學史』の中で、『私の知つて居る限りに於ては英國に重農主義者は一人も無かつた』<sup>2)</sup>と述べて居る。これ等に對して米國の學者エドヤン・セリグマン教授は異論を唱へ、一九〇三年の論文『數名の閑却せられたる英國經濟學者』の中で、スペンスの外に尙ほ二名の匿名著者を英國の重農主義者として數へることが出來ると論じて居る。<sup>3)</sup>この二名の匿名著者とは、『國富の重要原理』(The Essential Principles of the Wealth of Nations, illustrated, in Opposition to some False Doctrines of Dr. Adam Smith, and Others, 1797.)の筆者(註1)と、『經濟概説』(Sketches on Political Economy Illustrative of the Interests of Great Britain, intended as a Reply to Mr. Mill's Pamphlet Commerce Defended, with an Exposition of some

- 1) Higgs, Henry, The Physiocrats. Six Lectures on the French Économistes of the 18th Century, 1897. p. 137.
- 2) Oncken, August, Geschichte der Nationalökonomie. Erster Teil. 1903. S. 422.
- 3) Cf. Seligman, Edwin R. A., On Some Neglected British Economists. (The Economic Journal, vol. viii. 1903; Seligman, Essays in Economics, 1925. p. 65.)

of the Leading Tenets of the Economists, 1809.)の筆者とを指すのである。(註二)(註三)

(註一) この筆者が誰であるかは未だ不明である。パルグレイヴの『經濟辭典』第二卷サイモン・グレイ(Simon Gray)の項(二五七頁)には、この人が『國富の重要原理』の著者である、とあるけれども、セリグマン教授が考證して居るやうに、これは誤りであらう。因みにサイモン・グレイはジョウジ・パアヴズ(George Puvion)なる變名でも書物を著はした。なほ最近刊行の『社會科學ロンドン書目』第一卷には右の書物の著者をジェイ・グレイ(J. Gray)としてあるが、若しもこれがジョン・グレイ(John Gray, 1799-1850?)——所謂リカアディアン・ソウシヤリスツの一人——を意味するのであるならばジョン・グレイの出生の年と本書刊行の年とから考へて、これも明かな誤りである。かくてジェイ・グレイが如何なる人を指すのであるか不明であり、更に本書の著者がジェイ・グレイであるといふこともすらも極めて曖昧なのである

(註二) 米國の學者ヘイ博士は、其の著『經濟思想史』の中で、大體セリグマン教授の説を踏襲し、尙ほ外にエガアトン・ブリヂズ(Sir Egerton Brydges, 1762-1837)をも、英國重農主義者の一人に數へて居る。

(註三) マルクスは『剩餘價值學說史』第一卷の中で、『英國の重農主義者の中で擧げらるべきは』『國富の重要原理……』(ロンドン、一七九七年)(の著者である。これが直接に重農主義的學說に與する唯一の重要な英國の著書である。キリヤム・スペンスの『商業に依存せざる英國』(一八〇七年)は、一つの單なるカリカチュアにすぎない。この同じ男は、一八一四年乃至一八一五年には、土地所有の、(穀物關稅の)熱狂的擁護者の一人であつた、自由貿易を教ふる重農主義の基礎の上でこの男を、土地私有財産の不俱戴天の敵たりしトマス・スペンスと、混同してはいけない。』

以上述ぶる如く、英國の重農主義者の存否及び範圍については説が區々であるが、私は大體セリグマン教授の解釋に従ひ、彼が擧げて居る三名の英國重農主義者を認め、此處には其の中『國富の重要原理』の著者とキリヤム・スペンスとのみについて、彼等の學說を紹介しようと思ふ。蓋し『經濟概説』は今手許になきたため、其の筆者の學說を直接に知り得ないからである(セリグマン著前掲書六七——六八頁には本書の要點が述べられてある)。

- 4) Cf. Seligman, Essays in Economics. pp. 66. note 1.
- 5) Cf. A London Bibliography of the Social Sciences, vol. i., 1931. p. 740.
- 6) Haney, Lewis H., History of Economic Thought. Revised ed., 1920. p. 187.
- 7) Marx, Karl, Theorien über den Mehrwert, Erster Band, 1921. S.68. [マルクスエンゲルス全集第八卷91-92頁参照]

## 第一節 『國富の重要原理』の著者

この匿名著者の學說の内容は數點に分けて考へ得られるが、今は次の三點のみについて略説を加へることとする。第一は佛蘭西重農學派の學說に對する彼れの傾倒の程度であり、第二はスミスの重農主義批判に對する彼れの反批判であり、最後の第三は重農主義を英國に如何に適用すべきかについての彼れの政策論である。なほこの外に、かのアーサー・ヤングの租税に關する議論に對する彼れの批評も重要なものの一つであるが、此處には之を述べない。

**第一 重農主義的見解** 『國富の重要原理』の著者は、誰でも怠けないで勤勉に働いて居る人は何等かの程度に於て國富の増進に貢獻して居るのであることを、一應認めなければ、併し直ちにそれに引續いて、

『一國家の繁榮の主要にして最も不可欠なる原因は、その國家の農業土地の上で行はれる住民の創意と勞働とである。一國家繁榮の他の總ての原因を合しても、この原因には到底比敵しない。この原因のみが、一國家の生存及び蓄富の基礎たる收入を與へ得るのである、<sup>1)</sup>』

と論じて、農業及び農業勞働に特段の重要性を賦與した。而して彼によれば、この眞理は、『近年、佛蘭西の多くの有名な學者達によつて、正確にといふわけには行かないが、甚だ體系的に解説せ

1) Essential Principles, p. 4.

られた。彼等はこの故を以て Political Economists といふ名前で特色づけられて居る。<sup>2)</sup>』

かく述べてこの著者は、次の數頁を費して佛蘭西の經濟學者の三階級論を次の如く約説して居る。即ち、

『一國の年々の收入に對して何等かの點に於て貢獻する人民の異なる階級の第一は、土地の所有者であり、第二は、彼等が生産的階級といふ特殊の名稱を附して尊敬せる耕作者であり、而して第三は、彼等が不妊的又は不生産的階級といふ侮辱的名稱を附して貶下せる技工、製造業者、及び商人である。<sup>3)</sup>』

而して土地所有者は、土地の改良のために時折資本(ケネーなどのいふ avances foncières に當る)を投下するが故に、一國の年々の收入に貢獻するのである。<sup>4)</sup>次に耕作者は第一に固定資本(stock)ケネーなどのいふ avances primitives に當る)を投下し、第二に年々の勞働及び流動資本(annual labour and expenditure. 後者はケネーなどのいふ avances annuelles に當る)を支出するが故に、

年々の收入に貢獻するのである。而して農地は、これ等兩資本に對する正當なる利潤と、尙ほ其れ以上に剩餘生産物(v surplus produce)とを生産する。後者は地代なる名目の下に土地所有者階級に支拂はれる。耕作者若しくは農業者はこの利潤と地代との故に生産的階級と呼ばれるのである。<sup>5)</sup>

最後に商工業者は、地主及び耕作者をして彼等が直接に商工業に従事する場合よりもより少量

2) Ibid.

3) Ibid., pp.4-5.

4) Ibid., p. 5.

5) Ibid., pp. 5-6.

の勞働を以て内外の工業品を購入するを得せしむるが故に、間接に土地生産物の増加に對して貢獻するのである。併し彼等は彼等の消費する費用以上のものを生産しない點に於て、不生産的階級たるを免れない。<sup>6)</sup>

右は『國富の重要原理』の著者の觀たる、佛蘭西重農學派の三階級論の大意であるが、吾々は今この解釋の是非を判斷する必要はない。ここで重要なのは、この三階級論に對する彼自身の態度である。彼は全體に於て右の論に賛成の意を表したこと勿論であるが、併し必ずしもこれに全然同意したわけではない。

即ち彼は、社會の階級を土地所有者と耕作者と商工業者との三つに分けることには、佛蘭西の重農主義者に賛成したけれども、併し生産的か否かの標準よりして全人民を生産的階級と不生産的階級とに分つ場合には、耕作者のみを前者に屬せしめ、自餘の人々を凡て後者に屬せしめなければならぬ、となしたのである。<sup>7)</sup> 又彼は、國家の存立にとつて不可缺か否かの標準によつて、別に、社會の本質的階級と非本質的階級と (an essential class and an unessential class in society) の區別を設け、本質的階級の中には、(一)生産的階級たる耕作者、(二)製造業者、(三)軍人、及び(四)教育者を含めしめたのである。<sup>8)</sup>

かくて彼は、『佛蘭西經濟學者が土地の所有者を社會に於ける生産的階級に加へたるは、根本的

6) Ibid., pp. 6-7.  
7) Cf. ibid., p. 50.  
8) Cf. ibid., pp. 50-51.

誤謬である、』と論じ、更に、

『土地の所有者が自己の所有地の全部又は一部を自ら耕作する場合に限り、彼は確かに耕作者の仲間に加はり、従つて社會に於ける生産的階級の一員となる。併し彼が其の土地の耕作に實際に關與せず、單にこれを賃貸し他人をして耕作せしめ一定の地代を取る場合には、歐洲に於ては九分九厘までこれが現狀である。』その瞬間より彼は明かに生産的階級に屬することを止めて、社會の多種類の不生産的階級の一となる。<sup>10)</sup>』

と述べて居る。然らば土地所有者は社會の本質的階級であるかといふに、單なる地代受領者たるの資格に於ては、彼等は未だ本質的階級に屬するとはいへない。『地代の受領者が社會の本質的階級となるのは、國防のために地代が國家的に充當される場合のみである。<sup>11)</sup>』又『土地の耕作は人間の生存にとつて絶対に必要であるけれども、地代の支拂は土地の耕作にとつて絶対に必要といふわけではないのである。<sup>12)</sup>』

**第二 スミス批判** ケネーが商工業に従事する階級を以て不生産的階級となしたるに對して、

スミスは次の如き五つの批判を加へた。『國富の重要原理』の著者は其の各々に對して反駁をなしたのである。

一、(スミス)自己の年々消費する農産物の價值に等しき價值を再生産するにすぎずと假定されたる商工業者は自分達に代るべき二兒を生むにすぎざる兩親を以て不妊的又は不生産的と呼び得ざる如く、不生産的階級と名

9) Ibid., p. 49.

10) Ibid., p. 50.

11) Ibid., p. 51.

12) Ibid., p. 52.



づけらるべきではない。『國富の重要原理』の著者——以下單に著者と略稱す——かゝる批評は、重農主義者のいふ不妊的(*barrensténie*)なる言葉の眞意を正しく理解せざることより生ずる逃口上に外ならない。スミスの比喻こそは、却つて『佛蘭西經濟學者が不妊的といふ言葉に與へた意味——即ち、何等の増加をも齎らさない、といふ意味——の適切正當なることを確證するものである。<sup>1)</sup>』或る勞働が、假ひ何物かを生産しやうとも、勞働を遂行するために投下せられたる分量以上の分量を生産しないならば、この種の勞働をなす人々の階級は、正に、不生産的階級と呼ばれて然るべきである。<sup>2)</sup>

二、(スミス)商工業者の勞働は、奴婢の勞働と異つて、或る賣り得べき貨物の中に固定し且つ實現するが故に生産的勞働たるを失はない。(著者)商工業者の勞働と奴婢の勞働との區別はスミスのいふ通りであるが、『前者の勞働は些少ながら増加を齎すから生産的と呼び得る、』との結論は、如何なる論理を用ひても、この區別からは出て來ない。これ等兩種勞働の差異は、富についてのマイナスの程度の大小に存するのみである。<sup>3)</sup>

三、(スミス)或る形に於ける價值を消費し他の形に於けるこれと同額以上の價值を生産しないとて、商工業者階級はかの地主階級に比すればこの價值額だけ社會の收入を増加して居る、といふ意味に於て、不生産的階級ではない。(著者)かゝる主張は商業簿記でいふ二重記入即ち同一商品が同じ帳簿の中に二度記入されること (a second entry, that is, the same articles stated twice in the same account) を承認するに等し。<sup>4)</sup>

四、(スミス)農業者階級と雖も、節約によるにあらざれば、社會の眞實の收入を増加し得ざること、商工業者階級と異らない。(筆者)これは重農主義の學說の誤解に基く批評である。『收入の増加』といふことは重農主義者の直接目的ではない。『彼等の目的は收入の生産と再生産とに關するものであり、彼等はこの收入は農業土地の上で行はれる人間の創意と勞働とからのみ生ずると主張するのである。』<sup>5)</sup>

1) Ibid., p. 10.

2) Ibid.

3) Cf. *ibid.*, p. 12.

4) Cf. *ibid.*, p. 15.

5) Ibid., p. 18.

五、(スミス) 商工業は外國より農産物を輸入する手段となるから、その限りに於ては少くとも外國の農産物を以て國を富ますのである。故にこれに従事する階級を不生産的階級とはいへない。(著者)(イ)『問題が収入の生産に關するものである場合に、總ての商業取引の歸着點たる、収入の移轉といふことを以て、これに代位せしめるのは、全く非論理的である。輸出入貿易から如何なる利益が発生しやうとも、その利益は収入の増加ではなくてAよりBへの収入の移轉であるに過ぎない。』商業(commence)なる語は、既に創造された収入の轉換(commutatio mercium)以外の意味を有たない。』(ロ)工業品を輸出して外國穀物を輸入し得ることはいふまでもないが、若しもこの工業品の生産及び販賣に當る商工業者が農業に従事するとするならば、彼等は一層多くの穀物を生産するであらう。

わが匿名著者の以上の如きスミス批判は、其の立場がはつきりして居るだけ、佛蘭西重農主義に對するスミスの批判よりも、一層首尾一貫して居るけれども、併し彼は佛蘭西重農主義者と同様の缺點を免れない。即ち彼は、未だ價值の分析を十分になし得ず、従つて使用價值(生産物そのもの)の形の儘で其の増減を直接に計算し得る農産物を生産する階級のみを生産的だと考へ、或る階級の人々が消費する物(生活資料及び原料品)と生産する物(工業品)とが全く別の形態を採るために、これ等兩者を使用價值——交換價值ではない——として分量的に比較し得ない場合に合は、この階級を不生産的だと考へ、而してこの階級に屬する人々の中商工業者が利潤を得ることありとするも、それは貨物の流通行程(賣買)より生ずる利得——即ち、買手の損失を條件として生ずる利得——に外ならないとなすの、誤謬に陥つたのである。

6) Ibid., pp. 22-23.

7) Ibid., p. 23.

8) Cf. ibid., pp. 23-29.

### 第三 農業保護論 以上の如く農業を重要視したるわが著者は、必然的に農業保護の論を唱へ

た。曰く、

『耕作者階級を犠牲にして製造業者階級を増加しようとする國民は、それ自身の利益について甚しく盲目である。<sup>1)</sup>』

『耕作者階級は國家の收入を創造し且つ増加せしめる唯一の階級であるから、賢明なる國民は、社會に於ける多くの非本質的階級からばかりでなく、製造業者階級それ自體からさへも、人々を轉業せしめて、耕作者階級の人數を増加せしむるやう、有ゆる手段を熱心に講ずるであらう。……其の領土の一隅に未だ耕作されない部分がある間は、其の住民の勤勞を製造業にではなくてこの土地の耕作に向けしむることによつて、その國民は遙かに速かに繁榮を招來せしめ、遙かに鞏固にこれを確立せしめ得るであらう。<sup>2)</sup>』

『國民の收入は製造業からは生ぜず、總ての收入は農業から生ずるものであるとするならば、……大ブリテン及びアイルランドの地主達は、それぞれの立法院と協力して、耕作を兩島の山といはず谷といはず到る處に擴張せしむるやうな手段を遲滯なく講ずるものと、期待されて然るべきである。<sup>3)</sup>』

然らば實際に耕作を獎勵する手段として、この著者は如何なる方策を強調したかといふに、それは、佛蘭西重農主義者が理想的制度として推奨し、而して英國に於ては現實に益々擴がりつつあつた所の、資本主義的農業經營方法であつた。即ち、地主は其の土地を自ら耕作しないで、耕作に要する一切の資本投下を自ら引受ける農業資本家(farmers)に賃貸し、農業資本家は借地期間

1) Ibid., p. 43.  
2) Ibid., p. 45.  
3) Ibid., pp. 46-47.

中一定の地代を地主に支拂ふことを約束する、といふ制度——即ち lease の制度——の一般化、是れである。而して彼はこの制度の普及を圖るために左の如き手段を採るべしとなした。即ち、

『借地制度の欠缺——それはこの島國の一角のみに限られた不平の種子ではなくて、全王國の殆ど各州に瀰漫して居る不平の種子である——のために、農業者が土地の耕作改良を阻まれて居る間は、農業者に土地を貸さざることに由つて國民の繁榮を妨げて居る地主達に罰金を課するのが、立法府の義務である。この罰金<sup>4)</sup>は耕作されてゐない總ての土地に對して、地租を附加するといふ方法で課せられるのが甚だ適當であらう。』(註)

(註) 『國富の重要原理』の末尾に、借地制度に關するケイムズ卿の計劃並びにそれに對するジェイムズ・アンダアソンの贊辭(A General Plan of a Lease by Lord Cairns, with some Remarks upon it by Dr. Anderson, in his Agricultural Report for the County of Aberdeen. 8 pp.) が附録されてある。

かくて、わが著者によれば、借地制度の一般化は、啻に農業者の知識と技術と勤勞とを精一杯に自由に働かしむることによつて、農産物即ち國富の増加、從つて國家の繁榮を齎らすばかりでなく、亦地主階級の所得を、地主が自己の土地を自身で耕作する場合よりも、一層安固ならしめ且つ増加せしめることによつて、彼等の利益(從つて國家の安全)をも保護するのである。<sup>5)</sup>

以上の如き論策の必然の結果として、わが著者は都會無用論を唱へた。それによれば、人間は生れながらにして土地の耕作者たるべきものであるから、『人間が地表により平均に分布されて居れば居るほど、人間の繁榮は必ずや一層大であらう。』<sup>6)</sup>而して佛蘭西の經濟學者も、必要のないの

4) Ibid., p. 123.

5) Cf. ibid., pp. 123-125.

6) Ibid., p. 125.

に二萬三萬の人が都會に集まることを大いに非難した、といふのである。但し國防上必要なる海岸都市はこの限りにあらずとなす。然らば工業都市は如何といふに、彼はこの種の都市も不必要であると主張して居る。それは、國民にとつて無くてはならない製造業は、農村に於ても立派に之を爲し得るから、といふ理由によるのである。<sup>7)</sup>

なほ彼は、佛蘭西の重農主義者と同じく、かの單稅論 (land tax, single tax) を説いて居るが、ここには其の説明を省く。

之を要するに、『國富の重要原理』の著者は、佛蘭西の重農主義者の學說を大體に於て是認し、其の政策を英國全土に適用することによつて、英國の獨立自給を確保せんとした。對佛戰爭繼續中の主張としては常識的には洵に尤もな話である。併し乍ら、英國に於ては時恰も機械の發明相次ぎ工場制工業漸く勃興せんとし、他方に土地圍込運動によつて農業にも資本主義への躍進は現にあつたけれども、尙ほそれ以上に工業従つて商業の發展は著しく、彼れの如き重農主義的主張は既に時代後れのものとして餘り世人の支持を見出し得なかつたのである。折半小作制度が多く行はれてゐた佛蘭西に於て、而も商工業が微々たりし當時、農業の資本主義化を理想としたる重農主義者の學說なり政策論なりが一世を風靡したるは、蓋し當然であつたらうが、この思想を其の儘英國に適用せんとするは、時勢を知らざることを表示する以外の何物でもなかつたのである。

7) Cf. *ibid.*, pp. 125-128.